

南十字星

大阪大学外国語学部
(旧大阪外国語大学)
インドネシア語同窓会

2017年秋 第24号



会報の刷新!!

ページ数を「16」に増やしました。発行頻度の変更に伴う増頁です。写真ページの表紙を新たに加えました。

<寄稿>

- 2.3 丹羽慎吾(75卒) …海外駐在重ね
4 中川有喜子(95卒) …私の近況報告
5 高野郁男(62卒) …自撮り棒物語
10 立川若納(00卒) …再び扉を開けて
11 坂井美穂(09院卒) …試行錯誤の記
13 辻 和克(81卒) …旅で出会った人

6~8 **キャンパス便り**
原 真由子(教員)

9 Okie Dita Apriyant(留学生)
Bahasa Jepang Saja Tidak Cukup

ジャカルタ発

12 乙咩 宏(93卒) …変革の実感

14.15 **会長報告・集い・消息**

16 **協賛金・会計報告**

寄稿

Apa & siapa

海外駐在・曲折を経て

丹羽 慎吾 (1975年卒)



大学を卒業し総合商社に入り、小説「炎熱商人」(深田祐介著)の舞台となった部署でインドネシアからの丸太輸入に従事しました。10年後、機械メーカーに転職し、平成と年号が変わってからシンガポールに7年、タイに7年、インドに6年駐在し、そして昨年帰国するとインドネシアに駐在となりました。会社・職場は転々としながらも縁が続いて、やっとジャカルタへの“ホームイン”です。そんな私のこれまでの道のりを書いてみました。

《商社時代 1975～85年》

入社した商社は住友商事(東京)です。内勤を経て4年目に現地で検品のためカリマンタン、スマトラ、ブル島、パプアニューギニア等に行きました。輸入木材の丸太は港からは船積みされず、沖合に浮かぶ木材船に海岸からタグボートでまとめて曳航されるのです。用船契約しているのでも少しでも早く積まなければなりません。

丸太は工業製品ではないので適材不適材を仕分ける必要があります(写真)。時間がないと曳航中の丸太の上で波に揺られながら仕分け作業をします。海に落ちたらそれまでです。船側に着くと今度は不適材が積まれないよう船上から昼夜兼行で監視します。

入社6年目に現地の木材輸出会社に出向になりました。立木調査に参加した時は山の上にヘリコプターで下され、ジャングルの中を歩きながら目視で樹種、太さ、本数などを調査しました。山ヒルに噛まれた時はライターの火で炙ってはがしました。小川の側でテントを張り真っ暗な中で夜話をしたり、スクールが来て小川の水面



が上昇したりと大

変でした。赴任して3ヵ月後にイ国政府が丸太での輸出禁止令を出し、私は帰国することになりました。帰国して海外業務部に配属になりました。

そこでは東南アジア各国の拠点との連絡、事業本部間の案件調整、海外赴任予定者へのレクチャー、2国間会議に出席する役員への資料作り、そして海外経済協力案件の情報収集などを4年間担当しました。

《地方の小さな機械メーカーへ転職 1985～89年》

机での仕事合わない私は、知り合いの紹介で愛知県の窯業機械メーカーに転職しました。そこでは大手衛生陶器メーカーのマレーシアプロジェクトに関わったり、日本プラント協会の仕事でアフリカのザンビアで地質調査などに参加したりしました。

しかし、1985年のプラザ合意後の円高で輸出案件が途絶え、国内の焼き物産地を回る営業となりました。海外で仕事することに未練があった私を見かねて、ある人が今の会社を紹介してくれ2度目の転職をしたのです。

《シンガポールで工場立ち上げ 1989～91年》

新東工業(株)という鑄造設備製造会社です。入社し半年間の工場での研修の後、シンガポールで消耗品製造の合弁工場の立ち上げを任せられました。2年後に開所式場で本社長から今度はアセアン諸国を対象にシンガポールに事務所を設立せよと指示をもらい、その会社設立に関わり、私と先輩社員の2人が駐在員となりました。

《シンガポール時代 1992～98年》

アセアン諸国に機械を売り込むとともに、マレーシア、インドネシアに取次店を組織したりしました。シンガポールは華人国家でも複数の出身地があり、複数の中国語があることを知りました。



また、多民族国家でもあり、英語、中国語、マレー語、タミール語が共通語になっていて、独立記念式典のテレビ放送は2つのチャンネルで音声と字幕つき4カ国語放送でした。中国語は文字が共通でも地域によって

発音が違うのです。国籍、民族、言語がひとつだけなのは日本だけかもしれません(カット写真は私の家族)。

2人事務所だったので経理も担当し、1人で勘定が合わないと帳簿が閉められないという勉強もしました。当時、タイに日系企業が集中しつつあり、私の会社もタイに拠点を設立しました。

しかし1997年のパーツショックによりシンガポールの会社は閉鎖となり、私は日本に帰国しました。日本では国内支店のメンテナンス部に配属されました。設備の点検補修は休日出勤が多くありましたが、機械や工場のことがよくわかりました。そしてパーツショックの影響が終わろうとしていた2002年にタイへの駐在を命じられました。

《タイ勤務 2002～08年》

タイの会社はタイ経済の悪化から累積損を抱えていました。本社からの経理専門家の応援もあり4年後には累積損をなくし、会社は所得税を払えるようになりました。赤字案件一件一件の原因を明確にし、歯止めをかけることの重要性を学びました。バンコクでは来客が多く、昼も夜も忙しかった7年間です。

(Ⓧ社員旅行の記念写真)。

そして、タイの経済も回復し、会社も黒字化で



きて私は後輩にバトンタッチして帰国しました。送別会では社員の一人一人が、私と一緒に写った写真とコメントを書いた分厚いアルバムをもらいました。数年後にタイ時代に育てた社員と会議で会ったさい「問題

が起きたときには丹羽さんだったらどうするかと考えています」と言われ、人を育てる幸せを感じました。タイから帰国し、あとは60歳の定年まで本社勤務と思っていたら、今度はインドの駐在員事務所への勤務を命ぜられました。

《インド時代 2011～16年プネ、チェンナイ》

インドは日系企業の顧客がなかったのですが、日本人1人、現地人3人の小さな事務所が西インドのプネに設けられていたのです。赴任してすぐに現地法人になり、駐在員2名が増員されました。プネでは3年間。その後、設立された南インドのチェンナイ製造工場へ異動となりました(写真=会社の同僚らと)。



インドはエリートの転職が多く、私の会社も現地人社長が辞めてしまい、私が引き継ぐことになりました。現地の人たちは「俺の話を聞け」スタイルが目立ち、日本式会議ができず苦勞しました。それに、中央政府よりも地方政府が強い国です。インドの紙幣には15の地方言語で金額が表記され、地方都市の名称が英国時代の呼び名から地方語に変わっているのがそれを示しています。

チェンナイでは2015年に五十年に一度という大洪水を経験しました。携帯電話が3日間使えず部下と連絡が取れなくて往生しました。

また、インドは経済発展に伴うインフラの整備が追い付いていません。電力供給の不足です。メンテナンス日といって停電の日があり、連絡もなく停電することがありました。

* * *

各地駐在の間に韓台中、ベトナム、ドイツなどにも出張しました。現在、ジャカルタでは新東工業が日本から納入した機械設備のメンテ、部品販売する現地法人の責任者をしています。

シンガポールを除きずっと単身赴任。留守宅の妻とは今や友達感覚となりラインで連絡を取り合っています。便利な時代になったものです。長期に亘って私を支えてくれた妻には、心底感謝しています。私、今年まだ65歳。先を見つめ「好奇心を持って生き続けたい」という心境です。

寄稿

Apa & siapa

フィナンシャル コントローラーとして

中川 有喜子 (1995年卒)

2017年2月末日、「新型スーパーグレート」初号車の完成に立会いました。三菱ふそうトラック・バス(株)は、21年ぶりに大型トラックをフルモデルチェンジし、私は、プロダクト・プロジェクトの一員として、財務を担当させて頂きました。

この完成式典において、初号車が生産ラインを降り、鍵がプロジェクトリーダーから販売本部長に渡された際、「あとは任せたぞ！」とプロジェクトリーダーの心の声が聞こえたような気がしました。ひとつのモノを作り上げて次の組織に引き継ぐことができたプロジェクトリーダーの達成感、引き継ぎを受けた販売本部長の緊張感・責任感、それらがしっかりと伝わって来たのです。同時に「ああ、私はこの瞬間のために働いていたのだ」と胸中で確信していました。

開発、生産、購買、販売、財務等の組織が一丸となり、本プロジェクトを進行しました。ご想像のとおり、このようなビッグプロジェクトは一筋縄ではいかないもの。この数年間は大変な思いをしたこともありました。が、「ああ、そうだったのか」と、一瞬で納得が変わりました。

現在、私はフィナンシャルコントローラーとして日常業務に従事しています。フィナンシャルコントローラーという職種は、



あまり馴染みがない方もいらっしゃるかもしれませんが、販売、生産やプロジェクトの採算を財務面から管理する、大変面白い職種です。私は前職の10年間、商社で主に自動車を輸出販売しておりました。与信商売が多く、客先の財務状況に鑑みながらの販売です。そこで、財務会計に興味を持ち、退職後にも財務会計の勉強をしていました。今のフィナンシャルコントロー



千葉・舞浜の新車発表会
ヘリコプターの前で
17年5月
演出の

ラーは、これら両方の知識・経験を最大限活かすことができる職種であり、大変恵まれていると感じています。自動車メーカーに勤務を移したことで、製品に対する新たな知識や誇りも持て、更に幸せな日々を送っています。

上記のように充実感と希望に満ち溢れた時もあれば、当然、悲しい経験をしたこともあります。在タイ子会社の採算担当として、現地法人与自然工場を閉鎖しなければなりません。コントローラーとして、もう少し何か出来たのではないかと、とても残念な思いをしましたが、この出来事は少なくとも私の仕事観を変えました。

トラック製造業と言えば、極めてドメスティックなイメージをお持ちの方が多いと思いますが、グローバル化が進み、現在では私の配下は何と7割が外国人です。上司はドイツ人、その上司はインド人です。数年前まで、誰が想像できたことでしょうか。欧米人、アジア人等、様々な方々がいます。こんな状況で大切なことは、自分の意見を明確に且つ効果的に表現すること

ではないでしょうか。幸運なことに、私は“明確な数字”を扱う身。その数字の意味するものをメッセージとして発信していくことが重要であると考えています。

(会議写真は、様々な国出身の若手社員たちへのトレーニング風景)。

南十字星会の先輩方には、助けて頂いたり、アドバイスを頂いたり、いつも感謝しています。そして、恵まれた環境下で思いっきり仕事できるのも、同僚と家族の支えがあるからであり、更なる飛躍を目指し、日々業務に専念しています。

以上、私の近況報告です。

寄稿

Apa & siapa

自撮り棒物語

高野 郁男 (1962 年卒)

伸縮可能な金属棒の先端にスマートフォンやデジタルカメラを取り付けて自分の姿を撮影する道具を「自撮り棒」といいます。この商品は1980年代に当時のミノルタカメラが開発・発売しました。ところが当初は全く普及せず、30年程たって陽の目をみた商品といわれています。そして、ジャカルタがそのブームの発祥地と聞き、かねてから関心を持っておりました。

ある日、趣味のカメラを提げて浅草寺周辺を散歩しておりますと、明らかにインドネシアからと思われる若者グループが「自撮り棒」で撮影している姿に出くわしました。話しかけると、ジャカルタから1週間の予定で東京観光に来たといいます。そこで、「自撮り棒」のことをインドネシア語で何と言うのかと尋ねてみました。よくぞ聞いてくれたとばかりに「自撮り棒」に関する面白い話をいろいろと聞かせてくれたのです。

彼らによれば、2012年頃に写真が趣味のインドネシア人がタイでこの商品を目にし、母国で販売すれば爆発的に売れるだろうと興味を持ちました。早速、中国からの輸入品を『TONGKAT AJAIB』(不思議な棒=魔法の杖)として売り出しました。が、魔力なく思うように売れません。そこで『TONGSIS』にネーミングを変えてみたら、一気にトントン拍子ではやりだしたといいます。

『TONGSIS』とは TONGKAT (棒) + NARSIS (ナルシスト) の略語。直訳すればナルシスト棒あるいは自己愛の杖とでもいいでしょうか。日本語の「ジドリ」は「地鶏」をイメージさせて、味も素っ気もありません。それに比べ『TONGSIS』は的を射た絶妙のネーミングだと思います。2013年末頃からジャカルタで流行が始まり、一時イスラム教聖職者から「自撮りは神への罪」という批判もあったようですが、翌2014年にタイム誌が『ベスト発明品 25』のひとつとして紹

介したことが爆発的ブームのきっかけになったようです。

何故、ジャカルタで大受けしたのか。自分の顔大好き人間が多いとの説もあるようですが、定かではありません。ただ、フェイスブック登録者数がインドネシアは世界有数の多さであるといわれていて、このことと無縁ではないかもしれません。ジャカルタから始まった人気は瞬く間に東南アジア、中国(自拍杆)、韓国

(セルカ棒) から欧米 (selfie stick) にまで広がりましたが、日本ではブームにまで至りませんでした。

自撮り棒を伸ばして高い角度から背景を広く、大きく取り入れて撮りますと、通常とは一味違う写真が撮れるのも事実です。最近では瞳を大きく誇張したり、美肌に写る加工ソフトまで出てきました。SNS (ソーシャル・ネットワーキング・

サービス) にアップして他人から「いいね」を多くもらうのを楽しみにしている人が増えてきました。

より面白い、より過激な写真を求めるあまりに、危険な場所や場面での自撮りをして、これが高層ビルや渓谷からの転落、鉄道での感電、運転中の事故等につながっているとの報道もあります。日本ではJR西日本が、新幹線ホームで架線へ向けての使用をいち早く禁止しました。他の一部施設でも使用禁止が始めています。

物心ついたときから、カメラ内蔵のスマホや携帯が必需品になっている世代には、自撮り棒なき生活はあり得ないのかもしれませんが、マナーやルールを守って安全に楽しく素敵な写真を撮って欲しいものです。

(写真は、筆者が渋谷駅前交差点付近で自撮り中のグループを写した『渋谷ナウ』と題する作品で、全日本写真連盟東京都本部主催の第43回東京都写真展「東京の今」に入選)



1962年、住友商事に入社しタイヤ等資材輸出に従事。ジャカルタに3度、10年余駐在。95年退職し2000年まで住商建材勤務。その頃から趣味の写真を撮る。





キャンパス便り

言語文化研究科 准教授 原 真由子

(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)

1年ぶりのキャンパス便りです。昨年度後期から1年間のインドネシア語専攻の活動をお伝えします。

【2016年度】

夏休みはキャンパスを出てインドネシア！ ： CIS とスタディーツアー

4年目となる CIS (カップリングインターンシッププログラム) は、お世話になる研修先が変わり、バンテン州チレゴンにある PT. Cilegon Fabricators で行われました。8月21日から9月3日までの2週間、インドネシア大学の工学部と人文学部の4人、阪大工学研究科と外国語学部インドネシア語専攻(3年中島あやめさん、2年柴田拓真さん)の4人が、2つの混成チームに分かれ、企業の現状を考察し、文理の観点から課題を検討しまし



た。南十字星会ジャカルタ支部の方々にも歓待していただきました。ありがとうございました。

また、菅原先生主催のスタディーツアーは、西スマトラ州パダン市で8月26日から9月9日までの15日間行われました。17人(1年生13人、2年生4人)が参加し、アンダラス大学の協力のもと、現地の学生とともに、ミナンカバウ族社会の様々な側面について自分たちでインタビューを行い、現地調査を実際に体験しました。

スピーチコンテスト：神田外語大と南山大

11月12日、神田外語大学主催のインドネシア語スピーチコンテストに、3年の今川尚子さんがグループB(学習歴3年間～4年間)に出場しました。MEA (Masyarakat Ekonomi ASEAN) と日本の関係促進について発表しました。残念ながら入賞は逃しましたが、唯一の阪大の出場者として堂々のスピーチでした(写真)。



11月20日には南山大学でスピーチコンテストが開催されました。詩の朗唱の部に1年生の古谷幸之輔さんと岡田麻生子さんの2人が出場しました。古谷さんは Sutardji Calzoum Bachri 作の“Satu”を、岡田さんは Goenawan Mohamad 作の“Suami”を課題詩から選び、朗唱しました。岡田さんは2位に入賞しました。

語劇祭：“Sejarah Asal Mula Raja-Raja Jawa”



11月26日、27日の2日間、箕面キャンパスで語劇祭が開かれました。インドネシア語専攻はトップバッターでした。例年通り2年生が中心となり、Babad Tanah Jawiの一部をもとにして、学生たちで台本を作りました。いろんなタイプの王様が出てきますが、普段は女子学生が多数派の中で優しい(?)男子学生が、うってかわって勇ましく、雄々しい王様を演じていました。



箕面市連携講座：インドネシアの文化を知ろう！ 阪大生が見た“生きた学び”



1月28日に、3年目となる箕面市連携講座が小野原にある箕面市立多文化交流センターで行われました。第1部は、4年生5人が、市民の方々にインドネシアについて、また特に卒業論文を中心に大学で学んだことについて、発表しました。構成は次の通りです：報告1：インドネシア概要（藤崎拓海さん）、報告2：「インドネシアは子供の『しつけ』をしない？」（松本祐季さん）、報告3：「インドネシアの国会で活躍する女性議員」（鳥居葵さん）、報告4：「インドネシアの大衆音楽ダンドゥットの特徴」（後藤英知さん）。

祝卒業：

3月22日、大阪大学卒業式・大学院学位記授与式が大阪城ホールでとり行われました。式のあと、外国語学部は、大阪ビジネスパーク円形ホールで、各専攻別に卒業証書が手渡されました。

会場では、色とりどりの着物や袴、各地域の民族衣装をまとった学生が、卒業を喜び、友人との別れを惜しみ、写真をとり続けていました。インドネシア語専攻は9人が無事卒業し、8人が就職、1人が進学しました。

【2017年度】

祝入学：

新年度を迎え、4月3日、新入生が入学してきました。現在1年生は日本語専攻の1人を含め13人（女子9人、男子4人）です。さらに科目等履修生1人を加えて、全部で14人が週に5コマあるインドネシア語の授業を豊中キャンパスで受けています。



パスティカ先生、 ようこそ阪大へ！

サフィトリ先生の後任に、イ・ワヤン・パスティカ(I Wayan Pastika)先生が着任されまし

第2部では、インドネシアのコーヒーやお菓子をとりながらのフリートークセッションです。報告ごとにグループを分け、他の学生や留学生も交えて、市民の方々と自由に報告内容や大学生活について話し合いました。



サフィトリ先生ありがとう：

4年生の卒業を見届け、3月末にインドネシア語ネイティブ教員のサフィトリ・エリアス(Savitri Elias)先生が任期を終え、帰国されました。

6年間、どこに出しても恥ずかしくないインドネシア語を使ってもらいたいという信念で、インドネシア語専攻の学生を、厳しくも優しく、非常に丁寧に教えてくださいました。大阪外国語大学時代での任期を含めると、通算14年間インドネシア語専攻のためにご尽力いただきました。



た。バリのウダヤナ大学人文学部インドネシア語学の先生です。奥さんとお二人で大阪にいらっしゃいました。背が高く、カーボーイハットをかぶって出勤されます。初めての日本で、いろんな初体験の毎日をお過ごしのようなようです。

夏祭り：

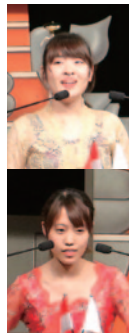
6月に入ると、墓石階段にテープを使ったデコレーションが現れ、箕面キャンパスの学園祭である夏祭りの準備が専攻語やサークルで始まります。インドネシア語専攻の学生も共同研究室でミーティングをやっていたようです。

7月1日、夏祭り当日を迎え、1年生は pisang goreng、2年生は mie gorengの屋台を出しました。よく売れて、黒字だったそうです。



スピーチコンテスト：神田外語大とインドネシア総領事館

昨年までは秋に行われていた神田外語大のスピーチコンテストが、今年は7月15日に開催されました。阪大からは、グループA（インドネシア語学習歴2年以内）に古谷幸之輔さん、吉野真輝さん、岡田麻生子さん（いずれも2年生）、グループB（インドネシア語学習歴4年以内）に藤森優菜さん、福田佳穂さん、大西茉那さん（いずれも3年生、写真④福田さん⑤大西さん）が出場しました。



古谷さんは、春休み中に行ったインドネシアでのボランティア活動を通して生まれた現地の友人との友情を大事にし、将来は農業において日本とインドネシアの交流を深めていきたいことを述べ、グループAの最優秀賞を受賞しました。

藤森さんは、ムスリム女性のジルバブについて話し、グループBの最優秀賞を受賞しました。



そして、吉野さんは、昨年パダンに行った時に日本語学習熟の高さに驚くとともにまだ教育

体制や設備が不足していることをふまえ、将来はインドネシア語の能力を生かし日本語教育の分野で貢献したいという希望を語り、特別総合最優秀賞を受賞しました。さらに、副賞として、8月17日のインドネシア独立記念日の記念式典へ招待されることになりました。（ポーズ④）



7月22日、在大阪インドネシア総領事館で、インドネシア語スピーチコン

テストが行われました。岡田麻生子さんが、民話の朗読の部に出場しました。4つの課題の民話から“Kisah kerah yang cerdas”を読み、民話の朗読の部で優勝しました（ポーズ⑥）。また、スピーチの部と民話の朗読の部を合わせた総合優勝も獲得し、副賞として、神田外語大のコンテストと同様に、独立記念日式典へ招待が決まりました。（神田外語大での写真は同大学の撮影です）

吉野真輝 朝5時にホテルを出発。

招待状を握りしめ、3度のセキュリティチェックを越え、Istana Merdeka（ムルデカ宮殿）へ。宮殿前の広場には噴水、その奥にモナスが見えます。来賓席のモニターに宮殿内の映像が流れています。ジョコ・ウィドド大統領をはじめ、ハビビ第3代、メガワティ第5代、ユドヨノ第6代の各歴代大統領の姿も。

厳粛な国家行事ですが、マーチングや様々な地域の歌メドレー、民族衣装コレクションなどが展開され、明るく楽しい雰囲気。72周年のテーマ「Kerja Bersama」を強く表したものでした。

同じ来賓席のインドネシアの方がプログラムの楽譜を見せ「一緒に歌おう！」と誘ってくれました。会場の一員になれた気分がとても嬉しかったです。式典後、計4社から取材を受けました。インドネシアに対する意欲がますます高まりました。「多様性の統一」、前向きな国民性を強く感じた1日でした。

記念式典と旅行招待…体験記



18カ国からの招待で、日本は写真の4人（④から2人目が吉野さん、3人目が岡田さん）



岡田麻生子 領事館主催のスピーチコンテストで優勝し、日本代表として、ジャカルタとバリでの様々なプログラムに参加させて頂きました。

毎日朝早くから夜遅くまで忙しく予定が詰まっていたのですが、充実の8日間でした。

ジャカルタ到着後インドネシア語検定を受け、ディベートに出場する代表を決めました。代表の方たちの討論を目の当たりにし、刺激を受けました。各国の衣装を着て、パーティにも出席しました。日本の浴衣を外国人がとても喜んで下さり、改めて日本文化の素晴らしさを実感することができました。

独立記念式典の他、博物館やモスクも訪れました。バリでは、綺麗な海や夕日を見たり、ラフティングをしたりと、大自然を満喫しました。18カ国の代表の方と触れ合う中で、外国人の積極性を見習うべきだと痛感。今回の素敵な経験を忘れずに、これからもインドネシア語学習に一生懸命取り組みたいです。

特別寄稿

Apa & siapa

Bahasa Jepang
Saja Tidak Cukup

Okie Dita Apriyanto

(大学院博士後期課程に在籍)



Alhamdulillah saya bisa datang ke Jepang (lagi), Negara yang mana bahasanya sudah saya pelajari sejak tahun 2005 silam. Awalnya saya belajar Bahasa Jepang karena ketertarikan saya terhadap anime “Slam Dunk” yang mana menceritakan tentang klub basket salah satu SMA di Kanagawa Jepang. Pada saat tahun 2005 kebetulan saya memang mengikuti ekstrakurikuler basket di SMA saya dan kebetulan juga anime tersebut ditayangkan oleh salah satu tivi swasta di Indonesia. Alhasil ketertarikan terhadap anime tersebutlah yang membuat saya ingin pergi ke Jepang dan sebagai langkah awalnya saya memutuskan untuk belajar Bahasa Jepang.

Pertama kali saya bisa datang ke Jepang adalah pada tahun 2009, namun bukan di Kanagawa, melainkan di

Chiba. Saya yang memutuskan untuk melanjutkan belajar Bahasa Jepang di tingkat universitas mendapatkan kesempatan belajar di Jepang selama 1 tahun. Selain belajar bahasa dan budaya Jepang secara langsung di Jepang, di Chiba saya memutuskan untuk ikut bergabung pada satu tim tari yosakoi di Chiba. Selain mendapatkan banyak teman dengan jenjang umur yang berbeda, saya pun bisa menikmati puluhan festival Yosakoi yang diikuti tim saya Chiyoren Hokutenkai. (写真中央㊤)

Sepulang dari Jepang tahun 2010, saya meraih gelar S-1 dan kemudian diberikan tawaran mengajar Bahasa Jepang pada almamater di mana saya lulus. Tanpa pikir panjang saya menerimanya dan sejak itulah saya resmi menjadi pengajar Bahasa Jepang. Merasa tak cukup hanya dengan mengajar Bahasa Jepang saja, saya pun memutuskan untuk membentuk tim yosakoi di kampus saya tersebut. Kami bahkan mengadakan festival tari yosakoi agar yosakoi semakin dikenal dan digemari oleh orang-orang Indonesia baik yang mempunyai ketertarikan pada Jepang ataupun tidak. (写真中央㊤、スラバヤで筆者の主宰するチームの踊り子と)

Pada tahun 2013 saya kembali berhasil

mendapatkan beasiswa untuk belajar di Jepang. Kali ini untuk program S-2 dan bukan di Chiba atau Kanagawa, melainkan di Osaka. Awalnya saya ingin kembali ke Chiba agar bisa kembali bergabung dengan tim yosakoi lagi. Namun, saya pikir Osaka tidaklah buruk untuk memulai petualangan baru di Jepang.

Berbeda dengan ketika di Chiba, di Osaka saya memutuskan untuk giat dalam memperkenalkan

budaya Indonesia. Saya yang terpilih sebagai ketua PPI Osaka-Nara pada periode 2014-2015 menggagas untuk mengadakan Pentas Seni Indonesia, sebuah acara yang mana menjadi ajang untuk memperkenalkan budaya Indonesia kepada khalayak Jepang. Selain sebagai penggagas ide, saya pun terjun juga sebagai pemeran utama dalam acara yang mengangkat cerita Ramayana dimana Hanoman sebagai

salah satu peran penting di dalamnya. (タイトル㊤の写真)

Memang benar di Jepang saya datang untuk belajar. Ketika dulu saya pernah meneliti tentang Akutagawa Ryunosuke, kali ini di jenjang S-2

dan S-3 saya meneliti tentang Aizuchi atau sahatan singkat dalam percakapan Bahasa Jepang. Namun, tak cukup rasanya hanya belajar atau meneliti. Saya rasa perlu turun ke masyarakat Jepang seperti bergabung dengan tim Yosakoi dan juga mengenalkan Indonesia dengan cara memperkenalkan budayanya pada masyarakat Jepang. Saya harap apa yang saya lakukan ini dapat menambah kecintaan saya terhadap Jepang, begitupula kecintaan masyarakat Jepang terhadap Indonesia.

Rasa haus saya terhadap pengalaman selain Bahasa Jepang tak berhenti di sini. Baru-baru ini saya mencoba untuk bekerja paruh waktu pada saat akhir minggu di Universal Studio Japan. Saya sangat menantikan pengalaman baru apalagi yang bisa saya dapatkan dari petualangan saya kali ini.



寄稿

Apa & siapa

再びインドネシアの扉を開けて

立川 若納 (2000年卒)

■大学時代

私が大阪外国語大学のインドネシア語学科に入学したのは1995年4月のことです。広島県の県立高校を卒業し上京した田舎者には大阪の全てが眩しくうつりました。色々なものに目移りして、お世辞にもインドネシア語に真面目に取り組んだとは言えない学生生活を送りました。

さらに悪いことに、在学中に友人と出かけた東南アジアバックパック旅行では、運悪くインドネシア滞在中に体調を崩してダウン。良い思い出が全く作れないまま帰国しました。それどころかインドネシアの前に訪問したマレーシアにすっかり夢中になり、マレーシアのマラヤ大学に留学するという迷走ぶりでした。

また、私は当時の国際文化学科の日本語専攻でもあったため、3年からはインドネシア語より日本語教授法や日本語文法等の勉強により多くの時間を費やすようになりました。当然のことながら、卒業時にインドネシアに関わる仕事を選べる語学力は備わっておらず、全くインドネシアとは無縁の企業に就職しました。

■インドネシアとの再会

そんな私をもう一度インドネシアに出会わせてくれたのが、今一緒に仕事をさせてもらっているインドネシア人のジョイスさん(写真、⑥が筆者)でした。

彼女と出会ったのは子供の通っていた保育園でした。ある日、どこからともなく聞こえてくる懐かしいインドネシア語の響きに振り返ったところ、そこにご主人と一緒にお子さんを迎えに来ていた彼女がいたのです。

彼女は当時、日系企業の進出支援やインドネシア市場視察のアレンジをする会社でコンサルタントとして働いていました。私はまだ行政書士の資格を取得したばかりで右も左も分からない状況でしたが、この出会いをきっかけにジョイスさんと連れだって、一緒にイ



ンドネシア関連のイベントに参加したり、彼女からインドネシア語を教えてもらうようになりました。

それからは、あれよあれよという間に彼女を通してインドネシアの深い魅力に引き込まれ、いまだに「よく分からなくて、納得できないことが多い」けれど「なんともいえず魅力的」なインドネシアの背中を追っています。私よりはるかに頭がよくビジネスのセンスもあるジョイスさんは、私を東京のインドネシア人コミュニティの集まりに連れていってくれ、様々な人物

を紹介してくれました。今でもそうですが、彼女と仕事の話をしていると夢中になって、時間が消えていくように感じます。気が付けば外が真っ暗になっていて2人で慌てて子供を迎えに走ったこともありました。彼女がいなければ私はいまだにインドネシアと無縁の生活を送っていたと思います。

■現在の仕事

インドネシア人を雇用している企業や、インドネシア人本人から依頼を受けて、日本に住むためのビザを入国管理局に申請する仕事をしています。

開業当時は本当に仕事がなく、「もしかしたら電話の線が抜けているのではないかと」何度も確認するほどでしたが、今では以前のお客様が次のお客様を紹介してくださるようになり、順調に受注件数を伸ばしています。また、区役所での外国人ビザ相談業務や、JETRO本部内に設置されている対日投資窓口「東京開業ワンストップセンター」の入国管理局ブースで在留資格の申請受付業務と相談業務を担当しています。

今年の3月に約20年ぶりにインドネシアを訪問し、ますますインドネシアの虜になりました(カット=ジャカルタのタムリン通り)。まだ子供が小さいため、あまり頻繁に訪れることはできませんが、幸い私のお客様はインドネシアと何らかの関わりをもって活躍される方ばかりです。そうした方々を陰ながらサポートすることで、こちらもワクワクとした気持ちにさせて頂いています。

中年になって再び開いたインドネシアの扉。今後とも与えてもらったこのご縁を大切に育てていければと思っています。



寄稿

Apa & siapa

Pokoknya Asyik Kan? その2

坂井 美穂 (09年院卒)



皆さまこんにちは。前回の寄稿よりはや数年が過ぎ、私の身の回りも面白おかしく変わりましたので、今回はそんなお話をしたいと思います。

私は学部を5年かけて卒業し、修士課程（修士在学中に、外大が消滅するという悲劇に見舞われ）を3年で終えた後、愚かにも勢いだけで指導教官の新しい配属先である、国際公共政策研究科の後期課程に進学しました。修士までは箕面キャンパスでの活動のみ。疲れたら研究室でお茶の飲める外大特有の雰囲気が好きだったのですが、博士課程の研究科は、豊中キャンパスにあるではないですか。この歳になって初めて通うキャンパスで、私は大変なアウェー感に襲われました。馴染みがないキャンパスに通うのも一苦勞でした。

博士課程に入学してから、何年経ったでしょうか、教えるのをやめた頃、これまでの研究や活動でお世話になっていた、国立アンダラス大学で教鞭を執る先生（当時は学部長）から、人文学部日本語学科に来てくれないかとオファーを頂いたのが、2015年5月でした。もちろん色々悩みましたが、自身の研究やキャリアにプラスになれば、と西スマトラ州パダンに降り立ったのが同年8月。大学ではすぐに新学年新学期でした。

自身のこれまでの外大での経験から、語学を学ぶというのは、多くても1クラス20人程度だろうと考えていました。しかし、赴任して分かったのは、1学年60人超、2クラスに分けても1クラス30人弱（留年組もちらほら）になります。初めてのセメスターは、3教科×2クラスで、1週間に6クラスの担当でした（それが後期からは4教科8クラスの担当に増えました）。教科書は、定番の「みんなの日本語」です。1クラス30人以上の状況で、インタラクティブな授業を行う、ということは、常に試行錯誤でした。この教科書はインドネシア語版の解説書も出ている有名な教科書なのですが、パダンの大学生が一般的に使っているものは、初版本（のしかもコピー）です。内容は古く、正直な



ところ、これをどのように勉強したら学生が面白く感じて、なおかつネイティブとの会話力がつくのか、日本語教育の基礎もない私には能力が足りず、常に悩んでいたのが会話の授業でした。作文の授業は、毎週テーマをもうけ、それについてディスカッションをして作文を書かせる、また短編を読み、感想文を書かせることをしました。私がスタンプを押して合格にするまで、ひたすらやり直しをさせました。もちろん、毎回の添削は大変です。しかし、最後の期末テストで、私が小学3年生で学んだ国語の教材を学生に読ませた際、たくさんの学生が涙して感想を書いていたのには、教える側の意図が伝わったように思われ、達成感がありました。また、授業の全てをインドネシア語で教えるということも、日本の文化や社会、歴史について、学生とよりじっくり考え、理解を深めるという良い機会となりました。

専攻会議にもできる限り出席しました。日本人としての規律正しさ（時間・約束を守る、連絡をきちんとするなど）は、自分自身が実行することで、口うるさく言わなくとも、学生や教員にも伝わるよう努めました。学生には、気軽に研究室に入りびたれるように、飴ちゃんなどを常備しました。日々の学生とのふれあいだけでなく、様々なお知らせや、ことわざ・熟語などをインドネシア語で解説した自前の掲示物の準備など、学生の目を引くためにありとあらゆることをしました。

学生にとっては、試験や課題が難しく、面倒臭い教員だったかもしれませんが、それでも、彼らの人生の一部と一緒に過ごした、将来と一緒に語り合った、そんな日本人のおばちゃんがいたなと時々思い出してくれれば、と願わずにはおれません。

現在は、在インドネシア日本大使館で勤務しています。前職とは全く異なる分野の担当ですが、これからも、外大で学んだインドネシア語を生かし、インドネシアと日本の将来に関わっていければな、と思います。

写真は ㊤学科がアクレディテーションA評価を取得した際の記念写真 ㊦最後の授業で学生がくれた記念品



変革感じるメガポリス

おとめ
乙咩 宏 (1993年卒)

執筆に先立ちまして、2017年3月6日に大島庄司先輩(86年卒)が急性胃癌でお亡くなりになられたことをお伝えします。小生にとっては学校の先輩だけでなく、会社の上司でもあり、最大の悲報でした。

いつも飄々とした感じにこやかにされていた方でした。会社は物流業(主に輸出入)でしたので、インドネシアの通関事情に最も詳しい人と周りから言われるほど優秀、小生の目標でした。本当に残念で、神様は残酷だと思わざるを得ません。ご冥福をお祈りいたします。



さて、小生ですが、1991年在学中に1年、就職後は駐在員として1998年から2004年の6年、今回は2回目の駐在で2013年から5年目、インドネシア滞在は延べで11年目を迎えました。振り返ってみますと、インドネシアは変わってきていると感じます。

学生時代の1年はただただ楽しかっただけでしたが、1回目の駐在そして今も主に税関(空港出口にもありますが、一般に輸出入を管理したり関税を徴収したりする役所のことです)相手の仕事をしていますが、仕事を通じてそう感じるのです。所謂、インドネシアの汚職体質についてです。

1回目の駐在の頃20年から15年前の世界ですが、税関に限らず、大体のことはお金で解決するのが普通、お金がなければ物事が進まないという雰囲気だったと記憶しています。当時ジャカルタ港税関には、たばこ売りが所々に座っていて少額紙幣に両替する両替商を兼ねていました。何用かと申しますと、その紙幣を書類に挟んで税関に提出するためでして、とても露骨なものでした。

そして今ですが、政府の方針、KPK(汚職撲滅委員



会)の台頭もあって、税関もすっかり様変わりしました。業者と税関職員が自由に会うことができず、何か特別な申請をしたい時は、税関の相談窓口で銀行のように番号札を取って番号順に呼ばれ、カウンター越しに話をします。カメラの監視付きです。

また、税関に限らず多くの申請がインターネットを利用した電子申請に代わってきていて、手続き現場でお金のやり取りは本当に少なくなっているようです。それで弊害も出ていて、例えば、汚職を疑われるのを怖がる職員が些細な不備でも手続きを進めようとしなかったり、電子申請ではシステムトラブルで度々手続きが止まったりするということがあります。それはインドネシアが変わっていかうとする途中経過だからと思っています。

もちろん、仕事絡みのことだけではありません。日常生活の中でも、分煙化しているレストランが多くなったとか、店でお釣りがきっちり返ってくるようになったとか、変わったと感じることは多いです。こうして、インドネシアも私達寄りの世界に徐々に変わっていくのかもしれない。

少々飛躍いたしますが、ある固い職業のインドネシア女性とお話することがありました。「日本では会社で女性に年齢訊いたら駄目なの？ 私なら、年齢でも、恋人がいるか訊かれても平気よ」と。もちろん、上記に書いたようにコンプライアンス遵守の方向に向かうのは歓迎しますし、正しいだろうと思います。ですが、インドネシアのだらかさはこのまま変わらないで欲しいと感じるのは小生だけでしょうか？(セクハラを肯定しているわけではありません)

☆ ☆ ☆

趣味で音楽をしたり、インドネシアで開催されている日本祭り(JAK JAPAN MATSURI、縁日祭など)のボランティアをしたりしています。タイトル右側の写真は縁日祭2017で演奏させていただいた時のもの。少し自慢が入ってしまいますが、イベントのフィナーレで使われるテーマ曲は、小生の作詞作曲です。

寄稿

Apa & siapa

旅で知り合った人

辻 和克 (1981年卒)

今から38年前、私のバンドン留学時代の話です。電車やバスを乗り継いで、気の向くまま途中の町々で数泊ずつする気楽な旅をしました。

ジャカルタ出発から1週間くらいたった頃の出来事です。夕方近くスラバヤの駅に降り立った途端、20人ほどのベチャ曳きの兄ちゃんらに取り囲まれました。身動きもできない状態で困っていたところ、ある中年夫婦が近づいてきて、見事に彼らを追っ払ってくれました。そして「私達もこの街に泊まる。一緒にホテルに行かないか」と誘うのです。ついて行くと、駅裏の小奇麗なホテルだったので一安心しました。

チェックイン後に小一時間、次の予定のバリ島について詳しく教えてもらいました。大助かりです。お礼を言って失礼しようという時、そのおじさん曰く、「今晚私らもここに泊まりたいけどお金が足りない。もしよければ、ちょっと貸して欲しいのだが…」

エッ! 驚きと同時に、「貸してくれて、いつ返してくれるの?」と思いながらも、お世話になった恩があるので口に出す勇気もなく、結局差し上げるつもりでいくらか渡しました。

翌朝、もっと色々教えてもらおうと受付で部屋番号を尋ねたら、何とその中年夫婦は泊まっていないとのこと。やられた! ああ、これがインドネシアなのか。暗い気持ちになりました。

でも数日後は、こんな出来事も吹っ飛んでしまうほど、素晴らしいバリ島(カットはバリの寺院)を満喫していました。

ある朝、かばんのポケットから小さな紙切れ。「甥がバリにいるから寄ってみなさい」と言っていたおじさんのメモ。クタの番地です。近くだ。デタラメでもいい。行ってみよう。すぐ探し当てました。

叔父さんに紹介されたことを話すと、快く家に招き入れられました。家族みんなでバリ案内をしていただき、昼食までご馳走になる始末。食後のコーヒータイムにその甥から質問がありました。



留学時代(78-80)の旅行、ジャワ島の
ディエン高原で地元の人らと

「ひょっとして、私の叔父が何か頼まなかったか?」

「はあ、何のことですか」と私。

「お金を貸してくれとか…」

「ええ、実は…」と私は事情を正直に話しました。

「やっぱり、そうでしたか。あの叔父はいつもそうなんだ」

結局、貸した全額が甥から戻ってきました。諦めていたのに予想外のこと。おまけに、その甥の暖かい心にも触れました。スラバヤでのショックが、バリでその倍くらいのイメージアップになった感じです。

一体、あのおじさんは何だったんだろう。詐欺師かペテン師か? いやいや、それなら、バリの甥のことを教えるはずはない。成り行きの軽はずみな行為? 計画的行動? 地元の常習犯?

確かに、おじさんはお金を「貸してくれ」と言って、結果的には全額「返ってきた」。叔父、甥ともに親切にしてもらって、大変助かったのも事実。

自分自身には罪の意識はない。あくまでも「借りた」つもり。貸した人には、いつか、どこかで、だれからか、お金は返っていくと漠然と思っている。また自分が借りたお金の分も、いつか、どこかで、だれかに、返す気持ちはある。金は天下のまわりもの。人が困っていれば助け、自分が困っていれば助けられる。それは、私とあなたの一対一の関係ではなく、私たち共同体全体の中での関係だ。共同体に個人の境界線は不要で、その究極は人類共同体。こんな世界観を無意識にあのおじさんは持っているのではないか。

普通ははっきりしているはずのお金を「もらう」「借りる」「盗む」の境界線が曖昧な世界があるんだ。「善人」と「悪人」の境目がぼやけている世界もあるんだ。

こういう体験を色々重ねて、若い私もインドネシアにずるずると惹き込まれていったのでした。その後、合わせて19年のジャカルタ勤務を経て昨年日本戻った今も、インドネシアへの興味は変わらず尽きません。



会長報告

宮崎 衛夫 (65 卒)

「南十字星会」会員の皆様には益々ご清祥のことと存じます。平素は同窓会活動へのご支援をいただき有難うございます。特に、会報発行のための協賛金へご協力いただいている皆様には厚く御礼を申し上げます。会報の発行頻度を従来の年2回から1回に減らすことについては、前号でご説明した通りですが、24号からはページ数を4頁増やし、全16頁とすることにいたしました。この会報発行のコストはすべて協賛金と幹事のボランティアで賄っております。ここ数年ご協力いただける方が80名前後に限られておりますので、他の皆様からのご支援もよろしくお祈りいたします。

さて、インドネシア語専攻の定員が現在の10名から2名増員の12名とすることが大学側から発表されました(実施は2019年入学者から)。2007年10月に大阪外国語大学と大阪大学の統合時に、インドネシア語専攻の定員は、それまでほぼ20名を保っていたのが一挙に10名に減員となりました。同窓会としてもこれは看過できず、統合以降のこの10年にわたり、総長、外国語学部長はじめ大学当局に根気よく働きかけてきた成果が一部出たとはいえ、この増員数は私どもの要望とはほど遠く、未だ25言語中最下位の定員数です。今後も粘り強く増員へ向けて働

きかけを続けていかざるを得ないと思っておりますので、この問題への皆様のご理解とご支援をお願いします。

別件ですが、1973年に退官された故・内藤春三先生が南十字星会に寄付いただいた浄財は、インドネシア語専攻学生の主に課外活動の経費を一部補助する資金として、担当の先生の口座に振り込んでおり、その残高推移は会報の「会計報告」欄に記載してきた通りです。今般大学

側からこの振込先を「南十字星会助成金」として大学指定の口座に振り込むようにとの要請があり、本年2月にそのように変更し寄付金を送ったところ、西尾総長から礼状を受け取りましたので、ここに掲載しておきます。なお、同様の礼状を外国語学部長からも受け取っております。

最後になりましたが、近年のインドネシア国の経済・政治面での地位向上に伴い、同窓生諸氏の活躍の場も益々広がっていくと思われる中、皆様の国内外での活躍・ご発展を祈念いたします。

平成29年2月13日

南十字星会

(大阪大学外国語学部・大阪外国語大学インドネシア語同窓会)

代表者 宮崎 衛夫 殿

大阪大学
総長 西尾 章 治 郎



拝啓 時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます。

本学が年々発展の一途をたどりつつありますことは、平素のひとかたならぬ御支援の賜物と深く感謝いたしております。

さて、このたびは、本学に対し下記の御寄付を賜り、誠にありがとうございました。

厚く御礼申し上げます。

これからも教育・研究に努力し、学術の発展と人材の育成に寄与して御厚志に添いたいと存じますので、今後とも、より一層の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

まずは略儀ながら書面をもって御礼申し上げます。

敬 具

記

南十字星会助成金

2016 年度総会

隔年行事となっている「南十字星会」総会が、総勢36名の参加者で2016年11月19日に大阪大学中之島センターで開催されました。大学側から松野先生、福岡先生、菅原先生、それに現役学生6名もご参加いただき、2000年以降に卒業された若手9名を含み、老若男女バランスのとれた賑やかな会となりました。

松野先生から「宗教的過激主義の行方」と題した講演をしていただきました。インドネシアは複雑な政治・社会構造を持っています。そして、グローバルの中で見たこの国が今抱えている諸問題を取り上げ、今後の課題についての解説でした。

その後昼食を挟みながら旧交を温める懐かしい話に花が咲き、またインドネシア語という共通の結びつきから



生まれる新たな知己を得て、時間を忘れるひと時を過ごすことができました。参加者の皆さんからの近況報告や、ジャカルタ支部長内原正司さんからの現地交通事情に関する情報の紹介。締めくくりに恒例となっている渡辺重視さん指導によるインドネシアの歌数曲を合唱し、2年後の総会での再会を誓い合いました。

2017年度関東支部総会

2017年6月10日、新宿住友ビル内東京住友クラブで関東支部の総会が開催されました。今年は海外旅行、海外出張と重なって出席できなかった方も複数人おられ、結果として20名参加という比較的小ぶりの総会となりました。

宮崎会長から冒頭、ご挨拶に加えて乾杯の音頭を取っていただき、終始和やかな雰囲気が進みました。

会員お互いの近況報告。その中で、1956年卒榎谷さんから独自に編集された lagu-lagu Indonesia (インドネシア歌集)のCDが提供され、これまで出席率の高かった会



員たちに記念品として贈呈されました。また、65年卒西川さんから昨年実施の大学グリークラブ90周年記念演奏会の報告と支部に対し協力御礼の挨拶がありました。

消息

中村 徹 (58 卒) =大阪府高槻市
囲碁と友人との会話を楽しみにしております。

山口 寛 (58 卒) =大阪府枚方市
年1回発刊に変わりましたが、引き続き母校とのよすがとして、会報が先輩から後輩への語り部的存在となることを期待して止みません。

寛田 滋 (59 卒) =埼玉県日高市
おかげさまで元気です。皆さま方には大変お世話になっております。

前田正一 (59 卒) =神奈川県鎌倉市
横浜でのボランティア活動や地元自治会などで元気しております。

道広健吾 (61 卒) =東京都大田区
最近大腸ポリープ、膵臓、胃がん、狭心症と続けて手術を行いました。何とか健康寿命で生きながらえたいと思っております。

石川恵二 (62 卒) =横浜市緑区
会報の編集を多忙な若手の皆さま方へお願いし申し訳ありません。継続が第一です。頑張ってください。

堀田 実 (63 卒) =千葉県船橋市
16年の秋は、飯蛸釣りに熱中しました。刺身、煮物、おでん、蛸飯など美味しいですよ。

岩谷英志 (64 卒) =大阪府池田市
小脳の難病で歩行障害。もう3年になります。リハビリを重ね筋力もついて症状への効果は今いち。ゆっくり悪化している感じです。落ち込まず前向きで頑張るのが体にもいいとか。

辻 修司 (64 卒) =タイ
ジャカルタを2007年に出て以来将来の生き方を考え、バンコクで過ごし始めて丸10年。京都の自宅にも年に3回は戻っています。生活の視点を変えることで人生を有意義なものにした

ひとこと (敬称略)

いのです。井の中の蛙では面白くないと思っています。

井上久生 (65 卒) =奈良市
40年余りの仕事を離れ、専ら音楽、絵画、歴史、旅行と Off business の世界を楽しんでいます。

沖 政夫 (66 卒) =神戸市
会報楽しく読ませてもらっています。会長と編集関係の皆さんに感謝。

鈴木安夫 (66 卒) =大阪府堺市
同期の山下勝男氏(東京都国分寺市)が平成29年春の叙勲で「瑞宝中綬章」を受けられました。

氏は外大卒業後、外交官となり、各国勤務を経てインドネシアのバリ、マカッサルで総領事、パプアニューギニアで大使を務められました。おめでとうございます。

朝倉俊雄 (67 卒) =横浜市戸塚区
毎年アジア各地を訪ねていますが、昨16年はインドのムンバイからパキスタン国境のアムリットサルまで足をのびしました。ワグ国境での国旗降納儀式と黄金寺院は一見の価値あります。

和田 肇 (67 卒) =奈良市
断捨離できずに困っています。

廣澤義幸 (76 卒) =大阪市住之江区
紛争を武力で解決しないASEANの努力を支持しています。

小畑史郎 (82 卒) =インドネシア
現在ジャカルタ勤務です。

堀川晃一 (91 卒) =マレーシア
16年3月末からクアラルンプールで文化交流事業に携わっています。

竹前望美 (94 卒) =宮崎市
幹事のお働きに感謝です。

平岡 毅 (94 卒) =大津市
出張で国内あちこちに出向き、もう少しで全都道府県を制覇できそうです。

投稿のお願い

会報第25号は2018年10月に刊行する予定です。投稿をお願いします。テーマは自由ですが、少しでも「インドネシア」を絡めてください。

締め切りは同7月31日。長さ1ページ1400字程度。カラー写真を必掲にしていますので、数枚同送を。原稿の送稿はEメールで。宛先

m-miyazaki@kobe.zaqa.jp (宮崎衛夫)
tani.kazuva@gmail.com にも Cc で送付してください。

伊藤 彩 (旧姓・多木06卒) =東京都
16年9月に伊藤延繁さん(14卒)と結婚しました。

井本信也 (07卒) =大分市
地元放送局で番組制作を担当しています。2児の父になりました。地震、豪雨と災害続きですが、九州の「大分」は元気です！

高田芳博 (07卒) =大阪府吹田市
大阪で人事の仕事をしています。世間の「働き方改革」に逆行して、毎日深夜まで残業、土日も半分以上は出勤する日々です。会報を見るたび、有休をとってインドネシアに行きたくなります。

◆おくやみ申し上げます◆

下記の方々のお訃報が届きました。
池永義啓(41卒)=札幌市、16年10月
大島庄次(86卒)=東京都、17年3月

※大島氏は住友倉庫に勤務、インドネシア、ベトナム、トルコなどで活躍。16年末に日本でがんの手術、海外に再赴任する予定はかかないませんでした。

「協賛金」ありがとうございました

郵便振込 あて先「大阪大学外国語学部
南十字星会」口座 00900-9-278638 用紙を同封

南十字星会は「協賛金」で運営しています。1口2千円、何口でも結構です。会報発行や運営の原資になります。振込用紙の通信欄を利用し、近況をお知らせください。

◎ご協賛いただいたみなさま◎ (敬称略、西暦卒順 2016年8月21日～2017年8月20日到着分)

- 42 近藤研三 56 梶谷昌博 60 林喜久雄 63 中川昌衛 65 宮崎衛夫 69 川島 巖 73 小田敏治 84 金井 篤 07 高田芳博
- 44 浜田広一 56 服部英樹 61 岩井俊之 63 堀田 実 65 森岡義典 69 中澤忠男 74 阿部直子 87 太田幸大 09 遠野友美
- 49 石川欣也 58 磯浦美恵子 61 木下 一 63 前田比佐夫 65 横田義明 69 藤本良信 75 石丸誠一 91 鴨川紀代 14 八木昭彦
- 50 山木迪男 58 河上宗弘 61 道広健吾 64 岩谷英志 66 扇谷竹美 69 本田正伸 75 小川秀洋 91 湯本容子 教 福岡まどか
- 50 脇田昭二 58 寺嶋正直 61 山下 進 64 小杉 功 66 沖 政夫 70 床次泰文 76 廣澤義幸 94 竹前望美
- 54 河野石根 58 中村 徹 62 石川恵二 64 小西新平 66 鈴木安夫 70 長尾善伸 77 大角幸彦 94 中岡和也
- 55 池田英彦 58 山口 寛 62 高野郁男 65 有井 晟 66 立川洲爾 71 竹沢寿広 80 片山信英 94 平岡 毅
- 55 梶谷敬二 59 丹羽宏造 62 松木 優 65 近藤 勲 67 朝倉俊雄 71 野崎淳一 81 道幸静児 95 沖中弘和
- 56 島崎忠彦 60 喜多山寛爾 63 大田中実 65 中村吉夫 67 和田 肇 72 塩見 澄 82 小畑史郎 00 立川若納
- 56 中園好哉 60 西田達雄 63 小原一浩 65 永田 悠 68 広瀬加代子 73 今村政幸 84 鶴田譲治 03 藤田裕子

転宅など住所変更の場合は、ご連絡を。

南十字星会 会報会計報告

(2016年8月21日～2017年8月20日)

収入の部		支出の部	
摘要	金額	摘要	金額
1) 前期繰越金	¥302,189	1) 会報(第23号)	¥224,002
		制作費	(151,200)
		通信費・BK手数料	(67,442)
		事務用品費	(5,360)
2) 協賛金	¥317,000	2) 総会費用	¥207,718
16.8.21～17.8.20着分		会場内	(189,600)
		通信事務用品・謝礼	(18,118)
3) 総会(31名)	¥155,000	3) 郵便振替手数料他	¥9,190
会費・ご祝儀		4) 協賛金繰越金	¥333,279
合計	¥774,189	合計	¥774,189

(注)内藤基金残高:408,374円

この基金からの学生支援の支出方法が大学の要請で変更されたため、一旦大学側から49,106円が返金され、新たな指定口座に150,000円を寄付。その結果、現在の残高。

2017年8月20日

南十字星会会長 宮崎 衛夫

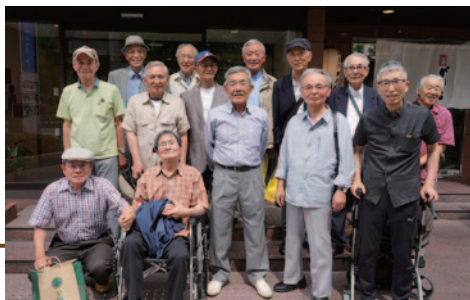
□ミニミニ同期会□ 会の開催が延び延びになっていた時、たまたま上京する機会があり東京在住の友に声を掛けて、東京駅で落ち合うことになった。16年10月23日。最近までバンドンにいた大田中君が奈良から上京してくれ、6人のミニミニ同期会を駅近くの居酒屋で。

63年卒。半世紀以上が経過しているが、元気一杯。近況を披露し合った。堀田君と島貴君は沖電気で海外経験も長かった。藪中君は神戸製鋼所の海外部で活躍。中川君は住友スリーエムに。それぞれ素晴らしい人生を送っている。



定年後ボランティア活動を経て「市議」になった変わり者も。かつての企業戦士は老いてますます盛んだった。(小原)

懐かしい仲間



□マタハリ会□ 64年卒同期生の集い「マタハリ会」が6月24日に開かれた。会場は新大阪駅近くの「がんこ寿司」。参加者は14人(岩谷、内原、岡本、小川、小杉、小西、澤井、品川、瀬戸、辻、西谷、藤野、吉田、渡辺)に増えた。初めは4、5人の会合。海外、全国各地からの交通の便などを考慮して場所を固定、日程を3ヵ月以上前に決めて通知していることが参加率アップに繋がった。

テーブル席は4つ。阿吽の呼吸で2、3人席が入れ替わる。2次会もお決まり、筋向いのホテルロビーで。「ジャカルタはこの先2年で大変革する」。現地地の情勢報告があった。

夏と冬の年2回。頻度は多い。体の障害や病を抱えていても、半年後の開催は格好の目標になっている。

編集後記 第24号から表紙を設けました。編集の作業中に浮上した新設案です。会報は投稿を軸にしていますので、表紙も会員からの「インドネシアの風景写真」で飾ることにしました。ご意見をお願いします。巻頭原稿の丹羽慎吾さんには急なパターン変更を了承いただきました。

「キャンパス便り」は盛りだくさん。インドネシア語スピーチコンテストでは母校の現役生が毎年優秀な成績をあげています。今夏8月17日の独立記念式典やバリ島旅行などに招待を受けた2人に、その体験レポートを頼みました。留学生の特別寄稿は、会員の要望に添いあえてインドネシア語で。実は日本語がとても堪能な方です。

増ページして、従来の会報より執筆者が増えています。皆さんありがとうございました。(K.T)